

令和元年6月6日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17300

研究課題名（和文）未来に抱く時間の広がり と 公正推論

研究課題名（英文）Relationship between justice reasoning and one's time perspective

研究代表者

村山 綾 (MURAYAMA, Aya)

近畿大学・国際学部・講師

研究者番号：10609936

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、（1）宗教性の程度によって、不運に対する公正推論（公正な世界の存在を求めるがために行う、「悪いことをしたら必ず罰を受ける」に代表されるような非合理的な推論）のしやすさに関する文化差が説明できるのか、（2）公正推論と時間認識との関連を検討した。そして、（1）日本人はアメリカ人よりも宗教への熱心さや信仰心が低く、遠い未来の補償をもって現状の不正を回復しようとする推論を行いにくいことが示された。また、日本人では、現在に対してポジティブな印象を持つ若者と高齢者、および、将来の見通しを立て、未来に向かって計画的に行動しようとする高齢者において、究極的公正推論が行われやすいことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、おおむね仮説を支持する分析結果が得られ、日本人が究極的公正推論を行いにくいことには宗教性の低さが関連していることや、個人の時間認識と公正推論に関連があることが示された。特に日本人は、現在の不正を過去の道徳的失敗に強く帰属する傾向が見られた。公正推論については、これまで欧米を中心に知見が積み重ねられ、理論が発展してきたが、東アジア地域では欧米と異なる傾向がある可能性を示したという点で学術的な意義は大きく、今後は理論のさらなる精緻化が期待される。極端な内在的公正推論を避け、究極的公正推論を通じた不正状態の回復手段をいかにして持ちうるかについて、今後考えていく必要があるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study investigated direct cross-cultural differences in immanent and ultimate justice reasoning about others' misfortune, as well as a relationship between justice reasoning and individuals' tendency of time perspectives. The results revealed that Americans engaged in more ultimate justice reasoning regardless of the target person's moral value than Japanese, and religiosity partly explain the difference. In addition, both young and elder Japanese who had recognized the present as positive tend to engage more in ultimate justice reasoning. Elder Japanese who had positive impression about their future also engaged more in the justice reasoning.

研究分野：社会心理学

キーワード：公正推論 時間認識 世代間比較 文化比較 宗教性

## 1. 研究開始当初の背景

われわれは、断片的な情報から、自分や他者に起こった出来事の原因や、先の将来を推論する。この時、公正な世界の存在を求めるがために、「良い人には良いことが起こる」や「悪いことをしたら必ず罰を受ける」に代表されるような、非合理的な推論を行うことがある。このような推論は公正推論（justice reasoning）と定義され欧米を中心に研究が進められてきた。そしてこれまでの研究から、公正推論には、ある人物に起こった不運をその人の過去の道徳的なに帰属させる内在的公正推論（immanent justice reasoning）と、不運は将来的に精算され、不公正が回復すると考える究極的公正推論（ultimate justice reasoning）の2種類がある（Harvey & Callan, 2014）。近年問題になっている、インターネット上で展開される刑事事件等の被害者への中傷なども、過去の無関係な出来事を引き合いに出すようなものがある。その背景には、公正世界を維持しようとするがための誤った推論の影響が指摘されており、実証的研究が進められている。

内在的公正推論は国内で実施した追試研究でも顕著に見られた一方で、現在の不公正状況を将来起こる出来事で精算しようとする究極的公正推論については、その促進要因などに関して欧米で得られている知見と一貫する結果が得られていない。例えば、宗教心によって究極的公正推論が促進されるという結果は、日本人を対象とした場合は再現されていない。行き過ぎた公正推論の抑制や、刑事事件等の被害者に対する第三者による非難の背景にある心理プロセスをより精緻に理解するためにも、過去・現在・未来の出来事がどのように公正推論で利用され、また何によってそのような推論が促進されるのか、引き続き知見を積み重ねていく必要がある。

## 2. 研究の目的

これまでの先行研究の知見や国内で実施した研究結果を踏まえ、本研究では究極的公正推論の促進要因に個人の時間認識が関連すると予想した。時間認識とは、時間そのものに抱いているイメージや、そのイメージと、死を含む自分の人生をどのように対応させているかということに関わる概念である。内在的公正推論と究極的公正推論は、過去から現在を推論するか、現在から未来の出来事を推論するかという点において、その時間軸に大きな違いがある。前者は推論の材料となる過去の出来事から現在までの期間が誰にとっても一定だが、後者は推論する人物によって、不公正が回復されるまでに見積もられる時間の長さが異なる。そして、例えば時間的焦燥感の程度が強い場合、未来の出来事で不公正が回復するという期待を持ちにくくなり、結果として究極的公正推論があまり行われなくなると考えられる。また、欧米では、日本人に比べてキリスト教を信仰する人々が多いが、キリスト教は直線的で連続的な時間認識（過去、現在、未来は直線上に並んでおり、それは永遠に続くものであるという考え方）を提供する。そのような時間認識は、不公正の回復までの期間を長期的に捉えることを可能にさせ、究極的公正推論を積極的に行うことにつながるのではないかと予想した。日本人を対象とした研究で、究極的公正推論の促進要因として宗教心の効果が得られなかった原因には、信仰する宗教がないとする人の割合が多いことや、日本人に馴染みの深い宗教が円環的な時間認識を提供する仏教であることが影響しているとも考えられる。

そこで本研究では、(1) 宗教性の程度や信仰の有無によって不運に対する公正推論のしやすさに関する文化差が説明できるのか、(2) 公正推論（特に究極的公正推論）と、時間認識との関連について検討することを主な目的とした。

## 3. 研究の方法

本報告書では、主要な3つの研究について詳細を示す。

### (1) 究極的公正推論の文化差に関する宗教性の媒介効果

**参加者** 日本人 88名（男性 = 44, 女性 = 44, 平均年齢 41.9歳,  $SD = 11.8$ ）、アメリカ人 88名（男性 = 44, 女性 = 44, 平均年齢 40.8歳,  $SD = 14.5$ ）

**実験デザイン** 2（国：日本、アメリカ）× 2（道徳的価値：よい人、悪い人）の参加者間要因であった。

**刺激** 街路樹が突然根こそぎ倒れ、男性が運転する車が下敷きになるというもので、男性が

(1) 過去に窃盗の罪で在宅起訴された高校教員か、(2) 熱心に生徒の指導に当たる高校教員かで道徳的価値の操作をした。

**測定項目** (1) 道徳的価値の操作チェックに関する1項目(6件法)、(2) 宗教性(4項目)(3) 内在的公正推論(3項目)、(4) 究極的公正推論(3項目)であった。

### (2) 信仰の有無が公正推論に及ぼす影響

**参加者** Prolific、および日本国内のオンラインアウトソーシング会社に登録している18歳以上の男女を対象に参加者を募集した。アメリカ国籍を有し、事前スクリーニングでキリスト教を信仰するもの、または、特定の信仰なし、無宗教、無神論者であると回答し、IMCに正答した108名（男性70名、女性38名；信仰あり46名、信仰なし62名；平均年齢32.5歳、 $SD = 11.1$ ）と、日本国籍を有し、事前スクリーニングで仏教を信仰するもの、または特定の信仰なしと回答し、IMCに正答した134名（男性43名、女性91名；信仰あり68名、信仰なし66名；平均

年齢 38.3 歳、 $SD = 9.4$ ) を分析対象とした。

**刺激** (1) で使用したものと同様のものを用いた。

**実験デザイン** 国籍 (日本、アメリカ) × 信仰 (あり、なし) × 道徳的価値 (良い人、悪い人) の参加者間要因であった。

**測定項目** (1) 道徳的価値の操作チェックに関する 1 項目 (6 件法)、(2) 宗教性の操作チェックに関する 4 項目 (例: 「自分の日常生活において宗教的、または精神的な信仰は重要である」)

(3) 内在的公正推論 (例 「この事故は、彼の日頃の行いが反映された結果と感じますか」) に関する 3 項目 (6 件法) であった。

### (3) 時間認識と公正推論の世代間・文化間比較

**参加者** オンライン調査会社に登録している男女のうち、18 歳～29 歳 (平均年齢 24.36 歳 ( $SD = 3.31$ ))、および 60 歳以上 (平均年齢 67.21 歳 ( $SD = 5.44$ )) の日本人 745 名とアメリカ人 744 名の計 1489 名が参加した。

**刺激** 研究 1 で用いたものに加えて、男性の道徳的価値情報を呈示しない条件を加え道徳的価値の操作をした。

**実験デザイン** 国籍 (日本、アメリカ) × 世代 (若年者、高齢者) × 道徳的価値 (悪い人、良い人、情報なし) の参加者間要因であった。

**測定項目** (1) 道徳的価値の操作チェックに関する 1 項目 (7 件法)、(2) 内在的公正推論、(4) 究極的公正推論、(4) 時間認識に関する個人差を測定する尺度 (時間的展望尺度 (Zimbardo, 1999)) を用いて各変数を測定した。

## 4. 研究成果

以下より、研究ごとの主な結果を示す。

### (1) 究極的公正推論の文化差に関する宗教性の媒介効果

媒介分析の結果、本研究の仮説と一貫して、日本人はアメリカ人よりも究極的公正推論を行いにくく、その関係は宗教性によって媒介されることが示された。すなわち、日本人はアメリカ人よりも宗教への熱心さや信仰心そのものが低く、その結果遠い未来の補償をもって現状の不正を回復しようとする推論を行いにくいことが示された (Figure 1)。

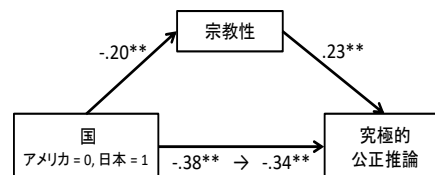


Figure 1 宗教性の媒介効果

### (2) 信仰の有無が公正推論に及ぼす影響

実験要因を独立変数とし、内在的公正推論を従属変数とした分散分析の結果、国籍、信仰、道徳的価値の有意な主効果が得られ、アメリカ人よりも日本人で ( $F(1, 234) = 28.85, p < .001$ )、信仰なしよりありで ( $F(1, 234) = 7.95, p < .01$ )、良い人より悪い人に対して ( $F(1, 234) = 74.28, p < .001$ )、内在的公正推論が行われることが示された。また、国籍 × 信仰 × 道徳的価値の交互作用効果が有意傾向であった ( $F(1, 234) = 2.78, p < .10$ )。信仰の有無による比較を行ったところ、アメリカ人は悪い人物に対して、信仰がある人のほうがない人よりも内在的公正推論を行う傾向があるのに対して、日本人では信仰による違いは見られなかった (図 1)。以上の結果から、アメリカ人については Harvey & Callan (2014) と一貫した結果が得られたが、日本人にとっては宗教性の有無による内在的公正推論の違いは見られなかった (Figure 2)。また、日本人は信仰の有無には関係なく、特に道徳的価値の低い人物に対してアメリカ人よりも内在的公正推論を行いやすいことも示された。

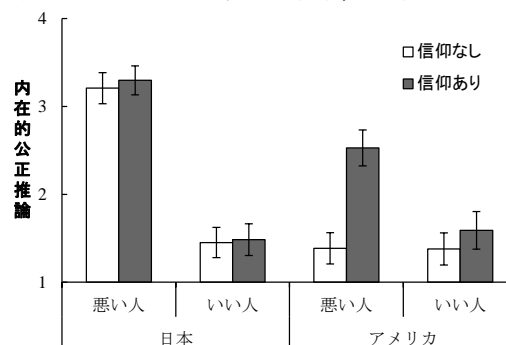


Figure 2 信仰の有無の影響

### (3) 時間認識と公正推論の世代間・文化間比較

文化、世代、条件ごとに、時間認識の個人差と公正推論の関係について相関分析を用いて検討した。その結果、アメリカ人では、世代を問わず快樂的で危険を好む「現在快樂」、自分の人生は天任せ、のような無力感を伴った態度を示す「現在運命」と内在的公正推論の間に正の相関関係が見られた。一方、日本人では、世代を通して一貫してみられる傾向はみられなかった。究極的公正推論との関連を見ると、道徳的価値の低い人物に対する傾向に文化や世代で違いがあり、アメリカ人は現在に対してネガティブな印象を持つ若者、自分の人生に対して無力感を伴っている高齢者ほど、この推論を行いやすいことが示された。日本人では、現在に対してポジティブな印象を持つ若者と高齢者、および、将来の見通しを立て、未来に向かって計画的に行動しようとする高齢者において、この推論を行いやすいことが示された (Table 1)。以上の

結果は、時間認識の特徴によって 2 種類の公正推論のしやすさに違いがあること、またその違いは文化や世代間でも異なることが示された。

これら 3 つの研究から、おおむね仮説を支持する分析結果が得られた。特に日本人は、現在の不正を過去の道徳的失敗に強く帰属する傾向が見られた。これは、罪を犯した人物が刑期を終え社会復帰をしようとした際に何かしらの不幸な困難に直面した場合、周囲の内在的公正推論によって十分なサポートが受けられないなどの弊害につながる可能性もある。また、極端な内在的公正推論ではなく、究極的公正推論を通じた不正状態の回復手段をいかにして持ちうるかについては今後さらなる検討が必要であろう。

Table 1 文化、世代、各実験条件ごとの公正推論と時間認識の関連

	いい人条件							
	アメリカ人				日本人			
	若年者		高齢者		若年者		高齢者	
	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR
Present Negative	-.07	.01	-.17	.10	.05	-.07	-.09	.38 **
Present Positive	.18	.04	.14	-.04	-.05	.04	.16	-.23 *
Future	.02	-.08	-.01	-.21 *	.05	-.01	.13	-.02
Present Fatalistic	.16	.39 **	.14	.41 **	.12	.16	-.07	.31 **
Present Hedonistic	.12	.25 *	.16	.24 *	.25 *	.20 *	.10	-.02
	統制条件							
	アメリカ人				日本人			
	若年者		高齢者		若年者		高齢者	
	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR
Present Negative	.12	.10	.11	.07	-.02	.12	.03	.23 *
Present Positive	.18	.08	.18	.11	.18	.17 +	.28 **	-.07
Future	-.05	.05	.05	.07	.36 **	.00	.16	-.13
Present Fatalistic	-.05	.32 **	.05	.04	-.08	.26 **	.01	.10
Present Hedonistic	.27 *	.23 *	.08	.21 *	.17	.21 *	-.01	-.06
	悪い人条件							
	アメリカ人				日本人			
	若年者		高齢者		若年者		高齢者	
	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR	UJR	IJR
Present Negative	.25 *	.07	-.06	.08	-.07	-.02	-.06	.08
Present Positive	.06	.17	.06	.06	.19 *	.17	.25 **	-.16
Future	.05	.06	-.04	-.18	.08	.16	.22 *	-.24 *
Present Fatalistic	.15	.18	.20 *	.22 *	-.07	.01	-.16	.13
Present Hedonistic	.08	.33 **	.13	.19 *	.06	.11	.03	.07

※UJR:究極的公正推論、IJR:内在的公正推論

### <引用文献>

Harvey, A. J., & Callan, M. J. (2014). Getting “Just Deserts” or Seeing the “Silver Lining”: The Relation between Judgments of Immanent and Ultimate Justice. *PLOS One*, 9, 1-8.

Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

### 5. 主な発表論文等

#### [雑誌論文] (計 3 件)

- ① 村山綾・三浦麻子. (2019, in press). 日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証—イデオロギーとの関係を通して—, *心理学研究*, 査読有, 90(2)
- ② 村山綾・三浦麻子. (2017). 刑事事件の元被告人に対するフォルスアラーム効果. *認知科学*, 査読有, 24(2), 213-219.
- ③ Murayama, A., & Miura, A. (2016). Two types of justice reasoning about good fortune and misfortune: A replication and beyond. *Social Justice Research*, 査読有, 29, 331-344.

#### [学会発表] (計 7 件)

- ① Murayama, A. & Miura, A. (February, 2019). Applying System Justification Scale to Japanese People and Society. 2019 Annual Conference of Society for Personality and Social Psychology. Portland, USA.
- ② 村山綾・三浦麻子 (2018). 内在的公正推論における世代間比較：日米における傾向の把握. 日本社会心理学会第 58 回大会論文集. 126.
- ③ 村山綾・三浦麻子 (2017). 日本語版 Moral Foundation Questionnaire の妥当性の検討. 日本グループダイナミックス学会第 64 回大会論文集. 63.
- ④ 村山綾・三浦麻子 (2017). 日本語版 Moral Foundation Questionnaire の妥当性:2 因子モデルにもとづく政治的態度との関連の検証. 日本社会心理学会第 58 回大会論文集. 53.
- ⑤ 村山綾・三浦麻子 (2016). 不運と幸運に対する将来の補償と罰-2 種類の究極的公正推論と文化差の検討 - 日本グループダイナミックス学会第 63 回大会論文集. 51.
- ⑥ 村山綾・三浦麻子 (2016). 不運に対する公正推論の日米比較-信仰との関連-. 日本社会心理学会第 57 回大会論文集. 280.
- ⑦ Murayama, A. & Miura, A. (August, 2016). Is the misfortune a result of past misdeeds or compensated for in the future? -Cultural difference in justice reasoning. International Congress of Cross-Cultural Psychology, Annual Convention. Nagoya,

Japan.

**〔図書〕（計 3 件）**

- ① 村山綾 (2018). 第 2 章：公正とシステム正当化. 北村 英哉, 唐沢 穰 (編). 偏見や差別はなぜ起こる?: 心理メカニズムの解明と現象の分析 ちとせプレス. pp.21-36. (総ページ数: 290)
- ② 村山綾 (2017). 裁判の心理学. 太田 信夫 (監修), 大坊 郁夫 (編集). 社会心理学: シリーズ心理学と仕事 10. 北大路書房. pp.26-30. (総ページ数: 151)
- ③ 村山綾 (2017). エピソード 56、60(集団凝集性、集団内葛藤). 谷口 淳一, 相馬 敏彦, 金政 祐司, 西村 太志 (編著). エピソードでわかる社会心理学. 北樹出版. pp.154-155, pp.166-169. (総ページ数: 191)